



2026年7月2日（木）
第9回EBPM事例研究会

問題意識

— ものづくり補助金にみる、EBPMの目指すべき姿 —

学習院大学経済学部

滝澤 美帆

ものづくり補助金EBPMの到達点

- 企業レベルのミクロデータ（TSR突合）に傾向スコアマッチングを適用し、反実仮想（統制群）を構築。
- 差の差・イベントスタディに加え、採択年度のずれ（スタaggerド）や経過年数別の異質性まで丁寧処理。
- 事前トレンドの確認、業種別・規模別のサブサンプル、波及効果のブートストラップ推論まで網羅。
- 手法面でアカデミアの知見・助言も取り入れた、高い水準の分析設計。
- **国内の補助金EBPMの中でも際立った到達点——一つの「あるべき姿」として捉えたい。**

そこから見える、EBPMが備えるべき条件

- ① 信頼できる因果推論 —— 反実仮想を明示する
- ② 豊かなデータ基盤 —— 継続的なミクロ情報の蓄積
- ③ 多面的な分析 —— 異質性とマクロまで視野に
- ④ 政策への還元 —— 結果を次の施策へ

■ **ものづくり補助金は、この4つをいずれも高い水準で満たしている。**

条件①②：信頼できる推計と、それを支えるデータ

- 申請前後の単純比較ではなく、統制群との対比で因果効果を識別。
- 傾向スコアマッチングで類似企業を選定し、差の差・イベントスタディで推計。
- 採択年度のずれを考慮し、事前トレンドの確認で平行トレンドの妥当性も検証。
- 毎年の事業化状況報告の蓄積とTSR突合が、この精緻な分析を可能にしている。
- **信頼できる因果推論は、地道なデータ基盤構築の上にこそ成り立つ。**

条件③：多面的に、そして率直に描く

- 事業規模の拡大を明確に確認 —— 売上高 + 7.3%、従業員数 + 4.7%。
- 業種・規模・経過年数で、効果の異質性まで丁寧に分解。
- 売上増加に伴う経済波及効果まで、視野を広げて定量化。
- 同時に、労働生産性という「次の課題」も率直に描き出した。
- **優れたEBPMは、心地よい結果だけでなく、次に取り組むべき論点も示す。**

条件④：結果を、次の政策へ還す

- EBPMの本質は、分析で終わらせず政策設計に還元すること。
- 規模拡大は実現、生産性向上は次の重点 —— という発見が得られた。
- この知見は、後継事業（新事業進出・ものづくり商業サービス補助金）の設計に活かせる。
- 「測って終わり」ではなく、「測って、変える」へ。

大局的に —— これを一つの標準に

- ものづくり補助金が見したのは、補助金評価が到達しうる一つの基準。
- 横展開の鍵は、データ基盤の継続・アカデミアとの協働・行政の分析体制。
- 個別事業の検証を、施策・政策レベルの学習へとつなげていく。
- 「**際立った一例**」を、**政府全体の「当たり前」**にしていけるか。

「測りすぎ」を超えて

- 測ることには、負担が伴う —— 「評価疲れ」も生じうる。
- だが、そのデータが信頼できる検証に活かされ、政策の改善につながるなら、負担は報われる。
- ものづくり補助金のEBPMは、それを実現した好例といえる。
- **測って、学び、変える —— EBPMが目指すべき姿。**